

1. 大学の概念と女子大学

今日、大学は急激に変化している。教育と関連して考えてみると、従来はヒューマニズム的な価値の観点から受け入れられてきた教育が、今や一つの商品として受け止められている。また、講義に使われる多様な媒体の開発が大きな変化をもたらしたものと考えられる。学生を一人の消費者として認識する視点や教育を商品としてみなす視点は、大学社会の運用構造と規範を変化させ、様々な情報媒体の発達は、教授-学生、学生-学生間の関係の変化のみならず、授業の方式の変化に伴う経済的側面での大学構造の変化をもたらした。

西洋の中世時代に大学というものが初めて出現した時、それは多分に実用的な目的を持っていたといえる。教会の修道僧、法律家、医者を育成する一種の職業学校としての性格を備えていたためである。純粋な知識の追求と学びの場としての大学の概念は、ルネサンス時代になってから、純粋な知的好奇心を背景にした私設の研究会とアカデミーから生まれた。現代の大学は、純粋な知識探求の場としての性格と、社会的・実用的なニーズに応えるため一定程度以上の知識と技術を身につけた人材を輩出する機関としての性格を併せ持っている。この二つの性格は、大学内において互いに葛藤をきたしたり、両立したりしながら、今の大学の性格を規定している。大学は、一定程度以上社会的ニーズに応えながら、純粋な知識追求という観点から知識の底辺を拡張させ、崇高な人間的価値の実現に向け取り組まなければならないという両面的な責任を持つ。こういった両面的責任の様相は、大学の機能が細分化、専門化されていない韓国の状況下では更に顕著な形で現れている。

上記の大学の機能が、特に女子大学と関連する場合、どのような問題を引き起こすのだろうか。女子大学は、どのようなモデルを設定し、大学の理念的な機能と実用的な機能を遂行していく上で、女子大学でなくてはならないという根拠をどう提示していかなければならないのか。これまで女子大学が堅持してきた女性教育に対する使命感と規範的自己正当化の論理は、21世紀にも通用されうるだろ

うか。女子大学は、変化した資本主義文化の中では、商品価値を失いかけているように見える。

今日の女子大学は自らの市場価値を高めるために、新たな需要を開発することを求められており、こういった取り組みの一環として生涯教育、パートタイムプログラム、週末教育、遠隔教育プログラムなどを開発している。これらの一連の取り組みにおいて見られるのは、女子大学は選択の余地なく、女性のニーズに呼応するプログラムと、女性の生活上の経験と特性に基づいたプログラムを開発しなければいけないということである。これは、これまで男女共学における教育プログラムとほとんど差別化されていない教育プログラムを持っていた、韓国の女子大学が特に注目すべきものである。女子大学における教育は、単純に女性向けの教育なのではなく、女性のための女性の教育にならなければならない。女性向けの教育とは、女性を対象にするというものに過ぎず、特別に女性のニーズと経験を反映していない反面、女性の教育とは「1.女性のために女性により提供される教育 2.女性のニーズにフォーカスを当てた教育 3.女性に関して設計された教育」である¹。

問題は、梨花女子大学のように大規模な一般大学が、知識の追求という普遍的な学問作業の場としての大学の理念と、女性教育とは女性の生活と経験に基づいた女性のためのものであり、女性の人間化のためのものだという、**女子大学としての使命**をどう融合させるのかということである。私達がこの問題に対する答えを容易に見出せない理由は、梨花女子大学がとても独特な存在であるからである。女性のみを対象とする医学部、法学部、工学部が設けられているという点、また規模の面で、世界のどの大学に比べても引けを取らないほど大きいという点が、梨花女子大学を独特な位置づけにしているのである。なぜ、専門職の輩出排出を目的とする領域においてすら、あえて女性のみを対象とする大規模な教育を行う必要があるのか。他の男女共学大学の医学部や法学部において女子学生の比率が急速に高まっている中、梨花女子大学は自己正当化の論理をどう提示できるのか。これらの問いは、詰まるところ普遍的な大学の理念を共有しつつ、家父長的な世

¹ キム・ヒョンウ, “生涯学習の行う社会における女子大学の役割,” 『教育学研究』 34, 1996, 415 pp再引用. Coats, M. *Women's Education*, PA: SRHE and Open University Press, pp. 1-2.

界において女子大学として持つ政治的な性格をいかに調和させることができるのかという問題に辿り着くだろう。梨花女子大学が前者の特性に重きを置き、大学としての効率性追求を1次的な目的とするなら、あえて女性だけを受け入れ、教育を行う理由はなくなる。もし、後者の特性を重視するなら、一般の男女共学大学と異なる学生募集方針と教育方法、効率性追求方式にこだわることになるだろう。しかし、共学になれば女性集団の制度化によるパワーと基盤を失うこととなり、女性としての社会的・政治的・知的な力を発揮できる機会は失われるだろう。学生募集方針と教育、効率性の追求において、女子大学としての特殊で非慣行化した方式を選択するのなら、周辺化してしまうリスクにさらされることになり、まさに進退窮まる事態に直面してしまう。二者択一だけが梨花女子大学として取るべき道でないとすれば、両者を調和させる方策に取り組みざるを得ないことになる。そして、その調和は、女性的価値とフェミニズム的価値に基づいた新たな学問のパラダイムを模索する中でなされなければならない。本日は、これらの点について論じたいと思う。

2. 女子大学とフェミニズム²

女子大学の社会的・歴史的意味を考えてから、未来を論じる理由については次のようにまとめることができる。

- 1) 女性教育機会の拡大という、女子大学の伝統的な存在理由が、共学に進学する女子学生数が増えるにつれ色あせてしまったという点である。これまで女性教育は男性教育とあまり差別化されないレベルで行われ、男性を中心に組まれた教育内容を女性を対象に教え、女性に適しているとみなされてきた学問(家庭、看護、言語、文学、教育、芸術)を中心に行われてきた。しかし共学に進学する女子学生数が増えるにつれ、教育機会の拡大や女性向けの教育という側面で女子大学の持つ魅力は失われた。
- 2) ややもすると、女子大学は周辺化することにより、女性平等権の確保を脅か

² 「女性主義」という言葉より、「フェミニズム」という言葉が、女性の社会文化的地位についてより一般的な理解を助けるものと考え、「女性主義の代わりに「フェミニズム」を使うこととする。

す事態を招く矛盾に直面しかねない。共学出身の女性が男性と対等な関係の中で競争、あるいは協力しながら仕事をする方法と技術を習得し、社会生活における適応能力を育み、対等な同僚として平等を実質的に確保する役割を遂行できるのに対し、女子大出身者はそのような機会が乏しかったために、女性をずっと第二の性として認識し、結果的に下級市民の地位に留まらせ、マイナスの影響を与えることになるかもしれない(すなわち、女子大学の存在は自己論駁的なものになり得る)。

- 3) これまで、女性的な学問領域にフォーカスを当ててきた女子大学が、現代の科学技術時代が求める、専門化した高コストな知識に対するニーズに十分に応えられるのか。
- 4) 依然ジェンダー差別的な構造を持っている世界の中で生れる女子大学の必要性と、当為性を、上記の1)、2)、3)の問題と関連させ、いかに確立するのか。

上記の諸問題は、女子大学がフェミニズムとの関係をどう設定するのかに集約されると思われる。女子大学が、適度な程度変形しクオリティーが低くなった教育——周辺的で大きな負担にもならず、専門的でない領域の教育——を女性向け教育の内容として設定し、女性だけを対象に行うという目標の下ではこれ以上生き残れず、その一方で女子大学を必要とする社会的環境も依然存在する場合、女子大学はいやおうなく具体的な女性のための、そして女性の経験に基づいた、専門化した教育を目標として定めなくてはならない。女子大学が集中すべき価値として、ある研究者は「(a) (女性の経験を中心に置く) 再中心化、(b) 多様性、(c) 合同的な学習、(d) 全体主義的なアプローチ、(e) 連結した知識」³を挙げている。多様な女性の経験に基づいて様々な形で表れる女性のニーズを満たしつつ、知識を拡張させる教育は、女性的価値(femine values)を肯定的に捉え、積極的に高揚させる教育であると同時に、女性主義的価値(feminist values)⁴と観点を受け入れる教育であるといえる。

³ DeFrancisco, Victoria Leto "The world of designing women: A narrative account of focus group plans for women's university," *Communication Education* 45 (Oct. 1996).

⁴ Rosemarie Tong, *Feminine and Feminist Ethics* (Wadsworth Publishing Company: Belmont, California, 1993), 1章参照

女性的価値とは、生物学的観点からであれ、社会文化的観点からであれ、女性の属性と認識されてきた価値、例えばケア、配慮、関係中心性、感性などをいう。これとは異なる、女性主義的価値は、ジェンダー差別と女性に対する抑圧を取り除き、平等と正義を実現しようとする政治的志向であり、女性主義の各理論の枠組みの中で多様な方式をもって具体化されうるものである。この両者は、互いに葛藤をきたす関係であるとも見られる。しかし、女性的価値の強調も、女性を中心におき、究極的には女性として生きることの意味を高めようとする意図を持つという点において、女性主義的価値と排他的な関係であるとみなす必要はないと思われる。

女性的な経験を中心におく学問の研究が、従来の学問的作業の枠組みから離脱することは避けられず、女子大学は女性的価値と女性主義的価値が介入する新たな代案としての理論、代案的学問のパラダイムと教育パラダイムを創り出す取り組みを通じて、自己の存在理由を確立していかなければならない。このためには、何よりも既存の学問における保守性と位階の中に取り込まれてはならない。また、学問間の横断的な連結と開放性に基づいた自由な研究作業を行うことが可能でなければならない。このような研究作業が成果を挙げるためには、様々な制度的な支援が求められる。更に、何よりも女子大学の構成員間において、進歩的かつ探検的な姿勢で学問に臨むことについての暗黙の共感が求められる。女子大学は、女性の経験が息づく理論と、理論によって裏付けられることで、これからは決して恥ずかしいと思われることのない女性の経験というものが、理性的空間の中で自由に表現される場である。そうすることで、女子大学は、単に女性を対象に男性が学ぶものを女性に見合う形で学習させる大学、また男子大学(男性が主流をなす男女共学)より少し劣る、あるいは男子大学を凌駕できない大学なのでは決してなく、新たな学問のパラダイムを創出できる、真の意味での大学としての女子大学に生まれ変わるのである。このような学問的作業と女性教育は共学においては可能ではなく、もし可能だとしても共学ではこれを遂行する意欲は全く見られない領域のものである。独自の学問的基盤を構築するための女子大学の努力なくしては、女性の時代は実現できず、もし取り巻く環境が女性に有利な方向に変化するとしても、それをクリエイティブに活用することはできないだろう。仮に女性のための形式的な条件が整えられるとしても、それらの内容は女性の手によって作り出されなければならないものである。

女性中心の学問と教育のためには、研究と教育の内的・外的環境を積極的に変えていかなければならず、女子大学の学問的課題について共感し参加しようとする熱意あふれる研究集団(このような研究集団には、学者が主軸となるが、芸術家、女性運動家、作家、経済専門家など、多岐にわたる女性経験と現場経験を持つ専門家も参加できる開放性が求められる)が必要である。このような研究集団、あるいは知性共同体が形成されて初めて、女子大学は女性的価値を中心に据えることができ、周辺化しないといえる。

一つの制度としての女子大学がその基盤を安定的に維持しながら、代案的な学問のパラダイムを模索するために、学内の研究所やセンターを斬新で実験的な学問領域を開拓する拠点として活用し、その結果を制度内でプログラム化する方法が考えられる。こういった方向が研究集団を活性化させることになるであろう。しかし、これが一つの大学内で小規模に進行する場合、その波及力や影響力の面で限界があるうえ、女性的価値と女性主義的価値の学問領域における実現は、周辺的で些細なものに留まる可能性が大きい。そのため、女子大学間の連帯による作業が求められるのである。この連帯が世界的なレベルで進行されるとすれば、その波及効果は大変大きく、その連帯の中で生まれる新たな学問のパラダイムは、女子大学の存在理由を証明してくれるはずである。その実現に向けて、女子大学が自ら努力を傾けることを怠る場合、女子大学は、女権伸長の進展と共学大学への進学する女子学生の増加に伴い、自然消滅するかマイナーな存在として周辺化してしまう道を歩むことになるであろう。

3. 時代による変化と集団化した知性のパワーとしての女子大学

女性的価値と女性主義的価値に基づいた新たな学問のパラダイムを模索することは、時代の変化に伴う形で進められることになる。時代の変化は、世界市場の登場、情報社会への転換、4次産業革命と呼ばれる科学技術時代の到来をもたらしたと要約できる。

- 1) 世界市場の登場と資本主義経済体制のグローバル化の中で、女子大学は大学の変化だけでなく、経済体制の変化が女性の生き方に及ぼす影響をも考慮に入れなければならない。変化する資本主義世界の中で労働市場も、いつよりも増して柔軟なものとなり、労働力の移動も活発に進行することになる。知

識の標準化と情報媒体の標準化がスピーディーに進む中で、女性労働力に対する社会的ニーズがどのように変化するのか、それに適応するために女子大学はいかなる教育内容と教育プログラムの強化を目指す必要があるのかについて考えなければならない。

2) 情報社会への転換は、人の生活様式と人と人との間のコミュニケーション方法に至大な変化をもたらしている。情報化が、主に男性集団、男性的視点を反映する企業と国家によって主導されていることを考えれば、情報化社会を支配する価値と規範もまた男性中心的に形成される可能性が高いといえる。その限りにおいて、女性は再び主流コミュニケーション構造の中で、自分を表現する言語と文法を失うことになり、他者化してしまうかもしれない。これを避けるには、女性集団が情報化の過程に介入し、情報の生産と消費の規則、そして規範を決める上で、女性の視点を反映させることが大事である。女子大学は、このような女性の集団化したパワーを大きくする拠点としての役割を担わなければならない。

3) 科学技術の発達により、私達は到来するであろう未来社会についての夢と絶望を同時に感じさせられている。女性の視点から考えるとなおさらのことである。科学技術に関する知識を身につけた人々の主流は男性であり、彼らが男性中心で家父長的な視点を捨てない限り、女性の未来は決して楽観できないといえる。女子大学は、科学技術を専門とする女性人材を育成するのみならず、知識と権力の連携に対して監視と批判の目を向け、全ての女性の権益を守るために、男性中心の科学技術に対する代案を模索することが求められる。これは、女性的価値と女性主義的価値に基づく科学技術の女性専門家集団によってのみ可能なことであり、この様な知性共同体が存在する唯一の場が女子大学なのである。

時代による変化は、自ずとなされるものではない。それは、以前から変化を夢見てきた人々によって主導され、彼らが願い計画を立て参加する形で進行するものである。女性は今や、歴史的変化に対して傍観者的な姿勢から脱皮し、変化を夢見ながら計画を主導する立場につく必要がある。そして、女子大学はそのための道しるべの役割を果たし、道を提示しなくてはならない。そうやって初めて、女子大学は、なぜ女子大学でなくてはならないのかという問いに対して、自己正当化の論理を提示することができるであろう。

21世紀においても、依然ジェンダー差別が存在するだろうか。答えはおそらくイエスであろう。もし、形式上の平等が達成されたとしても、平等の内容は私達の手によって決められるべきである。女性的価値と女性主義的価値を社会において実現することを通して、女性の経験について自由に表現することができ、女性の経験が卑下されたり軽蔑されたりすることなく、女性の経験が「おばさんの言うこと」と揶揄されない社会、そんな社会を実現し経営して行くために女子大学は必要なのである。梨花女子大学のような大規模な女子大学は、男性の力までをも包括できる母親-女性として、女性的価値と女性主義的価値という、両翼を持った強靱な母親-女性として、世界的な女性連帯を可能にする、巨大な子宮のような役割を果たすべきだと思う。